

## 特性シャイネスの日米間比較

### ——今なお「日本人はシャイ」か——

稲垣(藤井) 勉<sup>1,2</sup> 澤海 崇文<sup>1,3</sup> 相川 充<sup>1,4</sup>

<sup>1</sup>教育テスト研究センター <sup>2</sup>鹿児島大学 <sup>3</sup>流通経済大学 <sup>4</sup>筑波大学

本研究は、特性としてのシャイネスの高さが、日米で異なるか否かを検討した。従前より、日本人のシャイネスはアメリカ人と比して高いとする知見がある (e.g., Zimbardo, 1977)。この研究から 40 年ほどが経過した現在において、本研究は日米のシャイネスの様相について、日米それぞれ 1400 名以上のサンプルを対象に、あらためて検討した。分析の結果、現在においても、日本人のシャイネス得点はアメリカ人のシャイネス得点よりも高いことが示された。

**キーワード：**シャイネス，日米間比較，Web 調査

#### 1. 問題と目的

シャイネスとは、特定の社会的状況を越えて個人内に存在し、社会的不安という情動状態と対人的抑制という行動特徴をもつ症候群である (相川, 1991)。特性としてのシャイネスの高さは、高い孤独感や低い自尊心 (相川, 1992)、対人相互作用における発話の抑制などと関連している (飯塚, 1995)。Zimbardo (1977) は、シャイネスは万人に共通した経験であるとしつつ、日本人はアメリカ人よりシャイネスが高いと推測しており、Klopf & Cambra (1979) は、日本人はアメリカ人よりコミュニケーション懸念が高いことを示している。

彼らの研究から 40 年ほど経過した現在も、その様相は同様であろうか。Aizawa & Whitley (2006) は、日本人のシャイネスはアメリカ人より高いことを示している。ただし、この研究のサンプル数は両国ともに数十名と少なく、対象も大学生に限られていることが指摘できる。そこで本研究では大規模な調査により、特性シャイネスの日米間比較を行う。

#### 2. 方法

**2.1 調査参加者** インターネット調査会社のモニタである日本人 1448 名 (男女各 724 名, 16—69 歳), アメリカ人 1400 名 (男女各 700 名, 16—68 歳) から回答を得た。アメリカ人モニタの多くは白人 (74%), アフリカ系アメリカ人もしくは黒人 (9.7%) であった。

**2.2 材料** 特性シャイネス尺度 (相川, 1991) を使用した。アメリカ版への翻訳に際して、調査会社に翻訳を依頼し、著者全員で項目の確認を行った。16 項目, 5 件法である。

**2.3 手続き** 調査は 2016 年 3 月 (日本) と 2017 年 2 月 (アメリカ) に実施した。調査参加者は調査会社より案内された URL にアクセスし、複数の尺度への回答を行った。本稿では特性シャイネス尺度の得点に絞って報告を行う。

#### 3. 結果

**3.1 尺度の得点化** 特性シャイネス尺度について、国ごとに主成分分析を行ったところ、日本人では 45.87%, アメリカ人では 44.16% の寄与率が得られたため、1 因子解として逆転項目を処理した上で合算平均値を求め、特性シャイネス得点とした。得点が高いほど、特性シャイネスが高いことを示す (日米の順に  $\alpha = .92, .91$ )。

**3.2 分散分析** 特性シャイネス尺度の得点を従属変数、国 (日本人・アメリカ人) と性

(男性・女性) を独立変数とする二要因分散分析を実施した (Figure1)。国の主効果が有意 ( $F(1, 2844) = 41.14, p < .001, \eta_p^2 = .01$ ) であり, 日本人 ( $M = 3.21, SD = 0.72$ ) はアメリカ人 ( $M = 3.03, SD = 0.77$ ) より特性シャイネスが高かった。性の主効果も有意であり ( $F(1, 2844) = 22.84, p < .001, \eta_p^2 = .01$ ), 女性 ( $M = 3.19, SD = 0.76$ ) は男性 ( $M = 3.06, SD = 0.74$ ) より特性シャイネスが高かった。国と性の交互作用も有意であり ( $F(1, 2844) = 6.48, p = .01, \eta_p^2 = .002$ ), 単純主効果の検定を行った結果, 男女ともに日本人はアメリカ人より特性シャイネスが高かった。また, アメリカにおいて女性は男性より特性シャイネスが高かったが, 日本において男女の差は有意ではなかった。

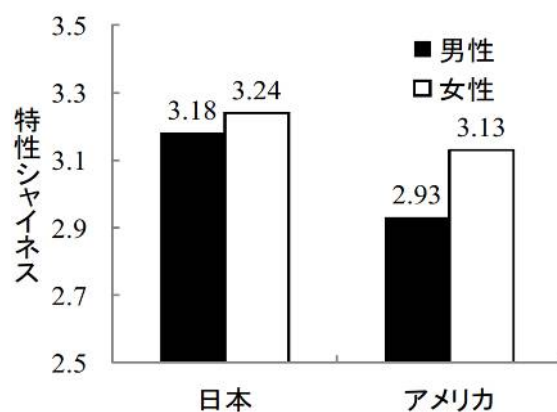


Figure1 日米の特性シャイネスの比較

#### 4. 考察

先行研究 (Klopf & Cambra, 1979; Zimbardo, 1977) から 40 年ほどが経過した現在においても, 日本人のシャイネスは男女ともにアメリカ人より高いことが確認された。そして, 日本人においてシャイネスの得点に性差がみられなかったことは, 相川 (1991) の結果が再現されたといえる。一方, アメリカ人において男女間で有意差がみられたことは, Elkind & Bowen (1979) の結果と一致している。

このように, 日米間のシャイネスの差異や性差について, 従前の研究と同様の傾向が観察されたといえるが, 分散分析における効果量は小さく, 大きな差とはいえないかもしれない。日本人におけるシャイネスのイメージはややポジティブに変容しているとの報告もあり (藤井・澤海・相川, 2016), こうした点も踏まえて, さらなる検討が必要であろう。

#### 5. 参考文献

- 相川 充 (1991). 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62: 149-155
- 相川 充 (1992). 大学生における孤独感と自尊心, シャイネス, 社会的スキルとの関係 宮崎大学教育学部紀要 教育科学, 72: 15-26
- Aizawa, Y., & Whatley, M. A. (2006). Gender, shyness, and individualism-collectivism: A cross-cultural study. *Race, Gender & Class*, 13: 7-25
- Elkind, D., & Bowen, R. (1979). Imaginary audience behavior in children and adolescents. *Developmental Psychology*, 15: 38-44
- 藤井 勉・澤海崇文・相川 充 (2016). 現代におけるシャイネスのイメージ調査 (2) ——自由記述を中心に—— 日本グループ・ダイナミックス学会第 63 回大会発表論文集, 103-104
- 飯塚雄一 (1995). 視線とシャイネスとの関連性について 心理学研究, 66: 277-282
- Klopf, D., & Cambra, R. (1979) Communication apprehension among college students in America, Australia, Japan, and Korea. *The Journal of Psychology*, 102: 27-31
- Zimbardo, P. G. (1977). *Shyness: What it is, what to do about it*. Massachusetts: Assison-Wesley.